

## 倫理学するのに倫理思想研究は（なぜ、どこまで）必要か

土屋貴志（大阪市立大学）

倫理学は「（最も広い意味で）規範の根拠について考える学問」である。「規範」とは、「～はわるい」「～はよい」「～してはいけない」「～してもよい」「～すべきだ」「～すべきではない」といった文（命題）で表現されることがらであり、規則、ルール、戒め、金言、法律、倫理、道徳などの内容をなす。「規範の根拠について考える」とは、どうして「～はわるい」「～はよい」「～してはいけない」「～してもよい」「～すべき」「～すべきではない」のか、というようなことを考えることである。それは、具体的な規範の検討（→応用倫理学）だけでなく、普遍的な原理的規範の探求（→哲学的倫理学）、規範を根拠づけること自体の意味の探究（→メタ倫理学）などを含む。こうした探究を行うことが「倫理学する」ことである。

これに対し、「規範の根拠について考える学問である倫理学とはどういうものか説明するのは「倫理学（道徳哲学）について語る」ことである。それは、これまで人類が「倫理学する」ことによって蓄積してきた成果、すなわち倫理思想や倫理学説とその歴史について説明することであり、その目的は「倫理学という学問では何がどのように論じられてきたのか」ということに関する知識を共有することにある。

この二つが明確に区分されるとは限らない。「倫理学について語りつつ倫理学する」こともある。しかし、倫理学という学問について何も知らずに「倫理学する」ことは可能である。たとえば、「なぜ嘘はついていけないんだろう」等の疑問を持ち、一生懸命その理由を考えている小学生は、確かに倫理学しているが、倫理学について語ることはできない。

「倫理学すること」を「倫理学研究」と捉えるならば、「倫理学について語ることは」「倫理思想史研究」である。「倫理思想史研究」の目的は、他者によってなされた倫理学研究（倫理思想）の内容を、可能な限り、その思想家が考えていたとおりに理解しようとするところにある。だが、倫理思想史研究が行われるとき、倫理学研究が行われているとは限らない。

倫理思想史研究は、倫理学研究の資源（resource）の一つにほかならない。倫理思想史研究を行うことで、倫理学する「技」（技術、技巧）に触れる。倫理思想の「スーパースター」の「スーパープレー」を目の当たりにして感嘆するとともに、それをまねることで、倫理学する自分の「技」をつくっていく。それは、演芸のパフォーマーやスポーツのプレイヤーが、他のパフォーマーやプレイヤーの優れたパフォーマンスやプレーを、作家が文芸作品を、作曲家が楽曲を、芸術家が芸術作品を、研究し分析するのと同じだ。目的は、分析すること自体にあるのではなく、分析によってわかった「技」をまねて、そこから自分の「技」を磨くことにある。

学士課程までの倫理学教育は、第一に、倫理学する人（「プレイヤー」）、倫理学の愛好者（「アマチュア」）を育てるのが目標である。そこで最も重要なのは「倫理学する」ことの意義や楽しさを伝えることだ。その際に思想史を教えるのは、倫理学するために最低限必要な、基本の「技」を身につけ、使えるようになるためである。「プロ」や「コーチ」である倫理学[研究・教育]者を育てるのは大学院課程以上になる。「倫理学について語る」ための思想史教育が必須になるのはここからだ。